



# ヒカリのおかあさん



東海林三郎

## ヒカリのおかあさん

---

ここは天国の3丁目にある人事課です。これから日本という小さな国に生まれる子供達が、生まれ変わりを決める神様と、どんな家に生まれるのか相談しています。

白いヒゲの神様は大声で言いました。

「何不自由ない大金持ちのうちに生まれ、顔はジャニーズ系で女にはモテモテの生活だが、最後は25歳の若さで交通事故死する。こんな太く短い生き方はどうだ！」

神様が、右腕を高く上げると30人の子供たちが一斉に神様に群がりました。一番先に神様の人差し指をつかんだ子供がその条件の家に生まれる権利を得るのです。

そのとき、子供の1人から質問がありました。

「太くて長い生き方はないんですか？」

「それは無理だ。人間の一生というのは、満たされないから修行になる。何もかも満たされたら、地上に生まれる意味がない」

神様に一蹴された子供候補は、その一言でガックリと首をうなだれました。

「次が一番きつい修業だ。生まれた先のお母さんに殺される。殺される時期は都合により言えない。それでも、こんな修行に行きたいヤツはいるか？」

この言葉にはさすがに、百人もいた子供たちも黙り込んでしまいました。その時、通称ヒカリと呼ばれていた子供が、ゆっくりと神様に歩み寄り、人差し指をつかんだのです。

「誰も行かないなら、僕が行きます」

「そうか……。やってくれるか。私はこの言葉を期待していた。嫌な修行でも、誰かがそれをやらなければならない。それではヒカリよ。30分後に地上に生まれなさい」

「わかりました。運命に従い、役目を果たして来ます。神様万歳！」

ヒカリはこう言うと敬礼し、真っ逆さまに地上に降りてゆきました。と同時に、温かく安泰な子宮の中に魂が入ります。子宮がギュウギュウと収縮している最中でした。ヒカリは本能的に狭く苦しい産道を目指して進みました。

「この苦しみを乗り越えれば、一瞬でもいいことがある」

ヒカリはそう信じました。いつか母親から殺されることになっても、生まれた時だけは祝福されると思っていました。

## 痛いよ！許して

---

ところが、生まれた場所は寒くてすきま風の入る、人里離れた山小屋でした。オギャーっと声を上げ、地上に生み出された瞬間、「一体誰の子かしら。どうしてあなたは生まれてきたの？やはり中絶すればよかった」

ヒカリには、お母さんの心の声が聞こえてきます。神様からは、泣けば母性本能をくすぐり、どんなに心の醜い母親でも、おっぱいを飲ませてくれると聞いていましたが、その母親は「うるさい！このクソガキ」と怒鳴りました。

それでもヒカリはもっと泣けば、おっぱいをもらえるのではないかと思いました。生きるため、全身の力を込めて「オギャー、オギャー」と泣きました。すると母親は、いきなりヒカリの顔を往復ビンタします。

大人の手でビンタされたら、生まれたばかりの子供はひとたまりもありません。このときグキッと鈍い音とともに、首の骨が折れてしまったのです。

「痛いよ。苦しいよ……。お母さん……。助けて……」と言葉に出しても、お母さんにはただ「オギャー」と耳障りな雑音に聞こえるだけ。

「だから生まれてくるなって言ったんだよう！」

お母さんは激高し、今度はヒカリの首を強く絞めました。

「僕は何のために生まれたんだ。神様、答えをください」こうつぶやきながら、ヒカリは口から血を吐きながら、小さな命を終えました。母親は何も後悔するわけでもなく、その小さな亡骸を山小屋の裏に埋めました。

## 愛されたんだよ

---

こんな山の中では目撃者はクマ以外、めったに来ません。誰にも知られることなく、母親の完全犯罪は成立したのです。やがて埋められた土の中から、ヒカリの魂が天に昇りました。待ち構えてた神様が両腕でしっかりとヒカ리를抱き、「御苦勞であった」とねぎらいました。

「神様、僕はガッカリしました。お母さんの笑顔を見ることもできず、会話することなく、殺されてしまうなんて…」

すると神様は無言で向こうを指さしました。そこには、食事も与えられずに密室で餓死した3歳児、生まれてすぐにコインロッカーに捨てられた乳飲み子…。そのまた隣りには、母親の愛人に腹を蹴られて、内蔵破裂で死んだ2歳の子が役目を終えて帰ってきたのでした。これら死して昇天した子の中で、唯一、アフリカで役目を終えた子供が笑っていました。

「僕は1歳で餓死したんだ。だけど、生まれてからずっとお母さんに愛された。お母さんは、いっぱい涙を流して僕の名前を何度も呼んだ。栄養失調のせいで、枯れて出なくなったオツパイをしゃぶり、僕は温かいお母さんの腕の中で亡くなったのさ」

「なんてうらやましい話なんだ。本当に幸せだったよな」

コインロッカーで死んだ子供が言いました。こうして雑談している子供たちの前で、神様が重い口を開きました。

「お前たちが今度地上に生まれるときは、やがて成長して親になる。その時は、生まれた子供を愛してくれるか？愛されないことが、どんなに悲しいか修行でわかっただろう。金持ちの家に生まれても、愛されなければ、幸せじゃないんだ。今回親からひとかけらも愛されなかった子供たちは、自分に生まれてきた子供を思いっきり抱きしめ、愛してくれ。そして、十分に愛されて亡くなった子供は、自分が愛された以上に、もっともっと子供を愛してくれ」

それから60年の月日が流れました。ヒカリはまだ、生まれ変わりの時期は決まっていません。待機してる間に、地上を覗く「天国テレビ」を見ていたら、自分を裏山に埋めた母親が、老人ホームでたった1人、寂しく死ぬところでした。

「許してほしい……。おまえを殺したことを許してほしい。太郎、ママを許してくれる？」

天国テレビには、かつての母親の心の声と映像が流れています。名も無きヒカリは太郎と名付けられていたのです。母親は小さな木彫りのお地蔵様を握りしめていました。子を殺したことを後悔し、40歳のときに買ったものでした。

「ヒカリ、どうする？最新医療の延命治療で、もっともっと苦しませようか？首を絞められた苦しさを与えようか？血を吐かせてみるか？」

神様は質問します。

「やめてください。かわいそうじゃないですか」

「なぜだ？あんな目に遭って！おまえはこの罪深く、救いようのない母親を許すのか？」

「わかりません。神様、このお母さんと僕を生まれ変わらせ、再び親子にしてください。そのとき、許すかどうするか決めていいですか？」

「わかった。それならば、汝を再び親子として生まれ変わらせよう。前は17歳だったが、今度は母親が20歳のときにおまえは生まれる。だが、その時代は日本もアフリカのように飢えている。いいのか？」

「いいです。飢えないで愛されないより、飢えて愛されながら死ぬほうが幸せだとわかったんです」

「戦争でミサイルが落ちて死ぬかもしれない。いいのか？」

「いいですよ。愛されていれば、手足が爆弾で吹っ飛んでも、愛されないよりはずっと幸せなんです」

神様はヒカリの手を握り、「まだ愛されると決まったわけじゃない。それに、どの時代、どの国、どの性別に生まれても大変だぞ」と念を押しました。ヒカリは今度こそ母親に愛されることを願って、再び同じ母親の元に生まれ変わるのです……。